『正親町帝時代史論―天正十年六月政変の歴史的意義―』第三章（岩田書院、2012年）

**「織田・徳川同盟と天下布武の構造」**

はじめに

一　織田・徳川同盟(清州同盟)

二　足利氏と新田庶流德川氏

三　天正十年家康の饗応をめぐる諸事情

四　東西複合国家体制と織田政権

おわりに―天下布武の構造―

補論５「織田・徳川同盟における地位関係について」

※『織田・徳川同盟と王権―明智光秀の乱をめぐって』第三章（岩田書院、2005年）

初出『郷土文化』第五七巻第二号、名古屋郷土文化会、2002年

（原題「織田・徳川同盟と天下布武の構造―信長の政権構想における家康の地位について」）

補論５は、原題「織田政権のモラトリアム―織田政権のモラトリアムと｢覇者｣の類型(上)」（『郷土文化』第６２巻第二号、名古屋郷土文化会、2008年）

本論文は、主査の中野等九州大学比較社会文化学府教授から査読を受けて、博士論文として提出し、さらに一部補筆して発刊している。

《要約》

　　幕藩体制の中核を形成した基本的な政治構造は、織田・徳川同盟にあるとした本論は、近世史全体にかかわる重大な問題提起となる。信長の政権構想を足利幕府の国家体制が、室町幕府と鎌倉公方・古河公方の系譜による関東の政庁による東西複合国家体制であったことと、信長の政権構想を通じて江戸幕府創成期の公武を統括する大御所と関東を管轄する将軍による分権について、その整合性を問う。

1. 織田・徳川同盟について、上下関係で捉えることが一般的であったが、天正八年の佐久間信盛の追放は、他の戦域で徳川の支援を受けながら、元亀三年の三方ヵ原の戦いでは力戦しなかったため、徳川家臣団に不協和音が生じ、築山殿・嫡子信康を中心とした謀反計画を誘発し、両人を処刑する結末に及んで、德川方からその処分を求められた事案であるとした。
2. 三河は、鎌倉以来、足利氏の根拠地であり、奉公衆の領地も四〇家以上もあるなど集中していた。ここで勃興した松平氏は、利害関係からも反足利氏であり、新田源氏を称していた。
3. 信長の権力基盤は、畿内は「織田・明智体制」であり、領域拡大の中核には織田・徳川同盟が存在した。
4. 信長は、平家を称し、源平交替のイデオロギーを活用したが、織田・徳川同盟の発展により、政権内では、一貫して幕府中興を目指してきた光秀と、武家支配体制の再編を志向する家康との間で、名目的には足利と新田という源氏の系統、実態的には三河の権益という問題が底流にあり、権力構造の矛盾が表面化した。
5. 信長は、家康と光秀を和解させようとして、安土城で光秀に家康への饗応を命ずるが、光秀は強く抵抗し、失敗に終わる経緯を説明する。
6. 信長の政権構想は、信長が太政大臣となり、公武を統括し、家康を征夷大将軍にして、関東を与えるものであった。この構図は、室町殿と関東の公方、大御所家康・将軍秀忠、大御所秀忠・将軍家光との関係と同様であるとした。